特集

祖師野八幡宮

郡上おどりの歌詞に登場する、二つの古社を訪ねて

郡上の夏を象徴する国重文の「郡上おどり」。新型コロナウイルスの影響で今年はなくなったが、例年7月から9月まで踊られる。日本三大盆踊りとも日本三大民謡ともいわれ、踊りも歌も400年以上の歴史がある。郡上おどりの10曲の中には郡上の歴史や名所旧跡を織り込んだ歌詞がいくつかあり、「郡上の八幡出てゆくときは雨も降らぬに袖しぼる」で始まる代表曲「かわさき」の一節には、郡上市和良町の戸隠神社と下呂市金山町の祖師野八幡宮が登場する。今は美濃と飛騨に分かれたが、実は近年まで同じ地域・文化圏に属し、関連が深いという二つの古社を訪ねた。

（取材・野村淳子）

昨年9月上旬の郡上おどりの様子

檜皮葺の社殿が立ち並ぶ祖師野八幡宮＝下呂市金山町祖師野

拝殿の床板は二枚重ね。大勢で踊っても大丈夫！

「踊らまいかよ祖師野の宮で四本柱を中にして」「祭り見るなら祖師野の宮よ人を見るなら九頭の宮」

「祖師野の宮」と歌われる祖師野八幡宮は、平安時代末期の1181年、地元の有力者田口左近光員が源氏の氏神・鎌倉八幡宮（鎌倉市、鶴岡八幡宮）の分霊を勧請して創建されたと伝わる。社伝によると当初は「榧野」（現在地より馬瀬川上流）に建立されたが、1415年に現在地の茅野に遷座されたとされる。

茅野は馬瀬川に面し、美濃から飛騨金山に続く古い街道沿いに位置する。金山巨石群の一つの岩屋岩蔭遺跡（妙見神社、明治以降は岩屋神社）は、岩屋ダム建設の際、祖師野八幡宮に合祀され、現在は同八幡宮の飛地境内地になっている。

遷座された後に建立された現在の拝殿と幣殿は、四本の柱で支えられた古い寺社建築様式を今に伝え、同八幡宮の異名「四本柱の宮」の由来となっている。

普段は内部非公開の幣殿を田口方一宮司（84）が案内してくれた。神様への貢ぎ物を供える幣殿の中央には四本の柱に囲まれた手斧削りの板の間。周囲よりわずかに高くなっており、手斧の削り跡が残っている。「手斧削りの板を幣殿に使っているのは珍しく、創建当時の古材を移したともいわれている」。江戸時代前期に奉納された県重文の宮太鼓も見せてもらった。祭りの開始を知らせる合図として打ち鳴らされ、今も現役だ。

幣殿の奥には江戸時代前期の建築で飛騨では珍しい彩色が施された本殿が建つ。「和良も祖師野も前は一つの地域で郡上郡に属していたので美濃。本殿に色が付いているのはそのせい。今はやらなくなったが、私たちの若い頃は盆や秋祭りの日に拝殿の四本柱の外側に輪を作って郡上おどりを踊った」と田口宮司が歌詞の内容を証言する。拝殿の床は板が二枚重ねになっていて、下駄を履いて大勢が踊っても大丈夫なようになっているそうだ。

「正八幡大神」の額を掲げた大鳥居の両脇には「門杉」がそびえ、本殿脇には「鎌倉杉」の巨木がある。「八幡の前に正の字が付くのは鎌倉八幡宮に由緒がある証し。門杉も鎌倉杉も樹齢800年を超えている。鎌倉杉は『鎌倉への旅で使った杖を地面に差しておいたら枝葉が伸びたもの』と伝わっている」と田口宮司。

祖師野八幡宮は白山信仰とも関係が深く、郡上市白鳥町の長滝白山神社の分霊を勧請した弓掛白山神社などの宝物類が移され、保管されている。また、鎌倉時代から桃山時代末期にわたって武蔵や播磨などの遠国からも奉納された「写本大般若経600巻」や経箱、平安時代の作で分霊の際に鎌倉八幡宮から移されたと伝わる十一面観音像も所蔵し、神仏習合時代の名残が色濃い。

郡上おどりに歌われている「祖師野の祭り」は例年10月に行われる秋の祭りを指す。健康と繁栄を願って神楽を奉納し、神輿や旗鉾の行列が出る古式ゆかしい祭りだが、今年は中止。「今までも流行病の時は中止してきたので、今回のコロナ禍も同じ。特別なことではない」と田口宮司。

祖師野八幡宮へは金山町の国道41号から国道256号を経て県道86号で約15分、岩屋岩蔭遺跡へは岩屋ダム方面に県道86号をさらに約10分ほど北上する。

祖師野八幡宮の本殿は彩色されている

古代史跡の岩屋岩蔭遺跡（妙見神社）。岩屋の中で悪源太義平が大ヒヒを退治したと伝わる＝下呂市金山町岩瀬

上 幣殿の四本柱に囲まれた床は手斧削り
中 四本柱が立つ祖師野八幡宮の拝殿。柱の外で下駄を鳴らして踊るため、床板が二重になっている
下 祖師野八幡宮の田口方一宮司